ひなまつり

渡辺一枝

情報センター出版局

ひ な ま つ り

渡辺一枝

情報センター出版局

渡辺一枝＝わたなべいちえ
1945年ハルビン生まれ。0歳児から障害児保育まで幅広く手がけ、保母歴18年。乳児からも「いちえさん、いちえさん」と呼ばれている。趣味は、野の花つみ、自分流料理の研究、人形つくり、染物、カヌーの川下り、早起きの深呼吸……などなど。著書に『自転車いっぱい花かごにして』『気が向いたら風になって』(ともに情報センター出版局) などがある。

ひなまつり

1987年2月20日　第1刷

著　者　渡辺一枝

定価　1500円　発行者　冨田耕作

発行所　株式会社　情報センター出版局

東京都新宿区四谷2-1
四谷ビル　〒160
電話　東京　(358)0231
振替　東京　4—46236

©1987 Ichie Watanabe
ISBN4-7958-0143-6
落丁本・乱丁本はお取替えいたします
印刷　萩原印刷

ひなまつり／目　次

第一章　私の雛人形　7

第二章　生まれた雛たち　21

蛤のお雛さま　23
マッチ雛　26
大豆のお雛さま　31
つぶ貝のお雛さま　48
石ころのお雛さま　52
糸巻きの雛　55
宇宙人のお雛さま　58
石鹸箱のお雛さま　60
サラダ雛　63
結び文　66
徳利雛　68

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

お椀の舟に 70
手毬雛 72
お手玉の雛 76
流し雛 78
琉球雛 80
御縁雛 82
初めての靴下で 84
翁雛 87

第三章　ふるさとの雛

雛の絵馬 93
奈良の一刀彫 96
屮芋彫（てっせん） 98
加賀雛 100
大内雛（おおうち） 102

粉河(こかわ)の流し雛　104
富山の抱き雛　106

第四章　ひなまつり　109

初節句に　111
菜の花雛　116
初めて買ったのは　122
宴　127
愛ちゃん　132

第五章　雛紀行　139

春の予感　141
人形の寺　144
雛市の立つ町　148

紅花の里で　153
遠い村　158
夏の日の雛　162
たゆとう舟に　168
撮影余話、そしてあとがき　177

装幀——多田 進
写真——椎名 誠

第一章　私の雛人形

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

私の初節句は、戦争中の満州でのことでした。小さな台にお宮参りの祝い着がかけられ、その上に縫いぐるみの犬や這子人形、セルロイドの起き上がり小法師が置かれ、天井からは薬玉が飾られていました。隅が折れ、セピア色に変色した記念の写真が、時代と、両親の願いを映しているように思えます。

いつしか私も、自分の子どもはそんな手づくりのお節句で祝ってあげたいと思うようになりました。また、学生時代にアルバイトしては買い集めた柳田国男の全集を読みすすむうち、人形に託した先人たちの想いを私もまた、自分の内に強く感じるようになりました。

一番最初のお雛さまは蛤の貝殻でつくりました。まだ結婚などは夢にさえも思わない頃でしたが、もしかしたらいつか生まれるかもしれない未来の私の娘に、とつくったのです。

貝の内側を淡桃色の絵の具で塗り、蝶番の窪みに緋色の紙の台をつけました。その台の上に、紙を切り抜いた小さな人形を立てました。それは、ずいぶんと素朴なつくりのお雛さまでした。

「私の子どものお節句は、私のつくった人形で祝ってあげよう。いつか、そんな日のために、毎年ひとつずつお雛さまをつくっていこう」

と、思いました。

一年のうちに二つも三つもつくった年もありました。紙コップのお雛さま、押し絵のお雛さま、石鹸箱、木琴の棒、携帯用の調味料入れ……と、材料はどれも身近にあるものばかりでした。

今となっては、いつ、どれをつくったのか定かではないのですが、いくつめかのお雛さまの年に結婚し、それから「家宝の豆雛さま」をつくりはじめたのです。それは大豆のお雛さまです。

そして娘が生まれました。私の雛人形つくりは「いつか生まれるかもしれない」子のためでなく、私の腕に抱いているこの娘のために、とつくるようになりました。

雛人形をつくりだしてから何年か後に、小さな個展を開きました。

11　私の雛人形

もうじき娘が二回目の誕生日を迎える年でした。

愛し子のお節句を高価な人形で飾るのでなく、願いをこめた手づくりのお節句で祝ってあげて欲しいという思いがあって、見てくださった方にそんなきっかけを掴んでもらえたら、と思ったのです。

郊外の駅ビルの画廊が会場でしたが、通りがかりに寄ってくださった方々が「こんなふうにして祝ってもらえる子は幸せですね」と言ってくださいました。

二日間の会期でしたが、私はドキドキしながら受付に座っていました。その私のところへ「あの雛人形を売ってください」と言ってこられた方が居りました。中年の紳士でした。

その方が指したのは、私が初めてつくった蛤のお雛さまでした。一番最初のお雛さまだったから、それは私にとってだけ意味があるもので、出来映えはどう贔屓(ひいき)してみても稚拙で、とても人にお譲りできるものではありませんでした。

私は、なぜ自分がこんな人形展をしようと思ったのかを、その方に説明しました。そして人形つくりの素人ではあるし、人様に売れるよ

うなものではないことをわかっていただこうとしました。

けれども、その方がとても残念そうに肩を落とされたのを見て、その隣に飾った押し絵雛でよかったら同じ物をおつくりします、と言ったのです。それはほたて貝の殻に、緞子（どんす）の衣裳を着せた押し絵の雛人形を貼ったものでした。そのほうが見映えがすると思えたのです。貝殻は立つように黒い艶紙で台もつくってありました。

その方は納得してくださいました。日を約束して、私は私の住所をお教えしました。その会場の駅よりもさらに五つも先の駅で降り、私鉄に乗り換える不便な所だともお伝えしました。

約束の日、その方は本当に訪ねてみえたのです。正直に言って、私は驚いていました。材料も身辺のガラクタや廃物、残り布などを利用してつくった人形たちでしたし、つくり方も複雑なものはなく、みな私の思いつきで生まれたような人形たちでした。そんな人形なのに、出来上がるのを待って、わざわざ訪ねてきてくださったのです。

私は、心をこめて桜色の和紙で人形をくるみ、リボンをかけました。「おいくらですか？」と問われても、「わざわざ電車賃まで使って来て

くださったのです。お代をいただくようなわけにいきません」とお断わりしました。でもその方は、どうしても受け取って欲しいとおっしゃるのです。私も困りました。

けれどその方は、私の返事にもっと困っているようでした。それで私は仕方なく「それでは五百円いただきます」と言いました。その方はそれでは安すぎると、結局二千円を置いていかれました。

どんな事情があった方だったのだろうかと、私は今でもその方が私の人形を求められた理由が気になっています。ご自分のお子に雛人形を求められるには、すこしお年がいっていると思えたのです。そしてまた、街にはもっと見映えのする雛人形が溢れてもいましたから。

どうしてもその年のお節句の日までに欲しいと思わせるような気迫にも押されたのです。それで何か事情があるように思えたのです。

その時いただいたお金はとても使えずに、今でも大事にとってあるのです。

その人形展ではもう一人、気になる人が居りました。人形展はどこにも何の宣伝もせず、ただその会場の駅ビル入口に、ここの案内を貼

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com